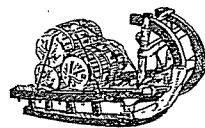


ベトナム国民と牧口教育学

『創価教育学体系』のベトナム語版の発刊に寄せて

グエン・ゴック・ジャウ

川村良子 訳



う。

牧口常三郎の『創価教育学体系』のベトナム語版が一九九四年六月に我が国の読者のために発刊され、たちまちのうちに、国内の学者・教育者の世界であまねく共感を呼びました。

牧口氏の教育学は、六十年以上も前に打ち立てられましたが、それらの思想が一九四五年に始まった我が国の教育政策に様々な形で反映されていることは、注目すべきであります。

ベトナムにおける教育には長い伝統があります。まず最初にその主要な変遷について概要を説明いたします。

十一世紀に、リ(李)王朝の初代の王、リ・タイトオ(Tha To)が都をタンロン(昇龍、現在のハノイ)に定めてまもなく、古代ベトナムにおける高等教育制度の最初の代表として、クオック・トゥ・ギヤム(王立大学)が創設されました。その後、我が国の多くの著名な学者が埋葬されているヴァン・ミュー(文廟)も建てられました。

十五世紀、レ(黎)王朝のもとで、この高等教育の学

び舎は拡大され、学生寮を含む一大複合建造物となりました。そこで、十一世紀から十九世紀に至るまでの封建王朝の時代は、クオック・トゥ・ギヤム(王立大学)・ヴァン・ミュー(文廟)が我が国の卓越した学者を輩出するための実質的な中心でした。

当時の古代ベトナム文字は、ベトナム語の発音を持った漢字体の中国文字で、上層社会の者しか教育が受けられませんでした。

教育課程の中では文学が最も重要な項目であり、国家試験は定期的はこの分野で行われました。応用数学に焦点を当てた試験もあり、数種類の試験が行われましたが、文学を対象としたものほど定期的ではありませんでした。一四〇四年に、文学、歴史、哲学、政治科学、数学を含む国家試験に関する法令が王によって発せられました。そのような試験制度によって、封建体制は行政のための官吏を選定しました。

十七世紀からヨーロッパの宣教師とともに、彼等は布教のためにローマ字を使用したもので、ローマ字の表記法が次第にベトナムに導入されてきました。二十世紀の初

頭からベトナムの教育は、主としてフランスの教育制度に類似した初等、中等、高等教育の近代的教育制度へと移行しました。

一九〇一年、当時のフランスの支配のもとで、ハノイにベトナム、カンボジア、ラオスの三か国のための最初の大学が設立されました。事実一九一八年になってやっと、フランス植民地政府は同大学の活動のための法令を出しました。当初は、インドシナ半島におけるフランスの立場を強化する必要性に応じて、農学部、医学部、法学の三学部だけでした。言うまでもなく、授業はフランス語で行われました。

ベトナムは一九四五年にフランス植民地から公式に独立しましたが、さらに九年間は戦争の渦中に置かれました。そして遂に一九五四年、国の北部だけを統治する政府が設立され、一方南部にはアメリカ依存の政権ができました。その時以来、ベトナムの南北地方の教育は、一九七五年の南北統一までの二十一年間、二つの別々の方式に従って行われました。

一九四五年のベトナム独立宣言後間もなく、ホー・チ・ミン大統領は次からなる全国的な教育改革を促進しました。

*「読むことのできる者は皆教師」とのモットーのもとに、ボランティアの参加をもつて、全国的運動によって成人の文盲をなくす。

*小学校、中学校のカリキュラム改革、就学年齢である子供達のための初等義務教育。

*高等教育制度の再編成（特に一九五四年以降）

当時我が国は破滅的な経済状態にあつたにもかかわらず、すべての教育において授業料は無料でした。

ホー大統領は、牧口氏が信じたように、「教育は人々の必要性ならびに日常生活から展開されたものでなければならぬ」ことを、また私どもの国が生き残り、発展するために必要なものでなければならぬことを認識されていました。

私どもは常に人間を最も貴重な資源として考え、教育の主要目的は人間のためであり、新しい世代の理性ある市民の養成であります。この点において、私どもは人

におけるその様な三者のパートナーシップ（一体化）を何度も促進されていたことを思えば、大変興味深い事があります。ここで詳細には述べませんが、実践的な教育活動における私どもの経験が明確にこの事実を裏付けるものであります。

さらに、我が国の教育者が若い生徒達に通常与えている最も一般的な助言は、「学びなさい。繰り返し学びなさい。そして永久に学びなさい」であります。これは、牧口氏の半日学校の価値創造教育の提言、即ち「学習を生活の準備とするのではなく、生活しながら学習し、学習の中で生活もする」^{(*)6}「生涯を通して、学習は生活の中にあり、生活の中に学習がある」^{(*)7}との思想を別の形で表現したものであるでしょう。

私は『創価教育学体系』のすべての論題にわたって述べるつもりはありませんが、私がこれまでに言及した論点によって、牧口氏の提言と私どもベトナムの教育政策との類似性を見出したのは、大変興味深いことです。では、なぜその様な現象が起こったのでしょうか。

間には生来創造的な存在である」との牧口氏の考え方と一致いたします。根本的な課題は、教育は各個人の創造的能力を「自分自身の人生を高めるとともに、自分の社会にとつて最大の利益を創造する」^{(*)2}ために活用すること可能にするものでなければなりません。各個人が、すべての人間が「自分達の基本的な必要性や安全だけではなく、安寧を構成するすべてのものに対して」^{(*)3}自分の住んでいる社会からの恩恵を受けていることを認識すべきであります。

私どもは現在、学習プロセス、あるいは教育方法の段階に移っています。私どもは、「知識を与えることが教育なのではなく、また決してそれが教育の目的であつてはならない」^{(*)4}との牧口氏の提言に近い考え方をしております。教育の目的は、むしろ、学習プロセスを導き、生徒自身の心に学習することの責任感を植える事です。

牧口氏の提言の最も革命的な点は、「効果的な教育は、学校、家庭、および社会の三者が一体になってこそ実現できる」^{(*)5}との思想であります。ホー・チ・ミン大統領が教育者として小学校から大学に至るまでの教育プロセス

おそらく日本とベトナムは、歴史および文化において多くの共通点を持っています。そしておそらく一九三〇年代における日本の教育改革の必要性が、一九四五年以降のベトナムと同じものであつたからでしょう。いずれにしても、牧口氏の提案、および私どもの教育の目的は、民衆のためであり、人類のためであります。

牧口氏の書物を読む時、日本とベトナムの距離を感じませんし、牧口氏の時代から今日まで何年経ったかを感じる事はありません。私は、現在私どもが行っている教育改革について現代のベトナムの教育者と話し合っているかのような印象を持ちます。

この事は、すべてのベトナムの読者の感想でもありません。

発展する現代の世界状況のもとでは、各々の国が、相互利益の追求のために、他の国々を理解し、接触を持ち、相互に影響し合わなければなりません。ベトナムと日本の関係も同様であることは、言うまでもありません。

牧口常三郎氏の『創価教育学体系』のベトナム語版は、この方向への一歩前進であります。

以下は「創価教育学体系Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」（聖教文庫）からの引用です。（訳者注）

*1 「ジョン・デューイ氏が『生活のために、生活に於て、生活によって』というたのは吾々教育者の味わうべき語である」（Ⅰ、一四九—一五〇頁）

「科学は生活より出発するものであり……教育学も又日常の教育生活の観察より出発して、基の上に組織される可き性質であるから……」（Ⅰ、八九—九〇頁）

「日常の生活を直観して学問させ、その学問を応用して生活上の価値の創造にまで結び付けしめる指導をなしてこそ初めて教育の手段たるに足り、生活に合致するのである」（Ⅳ、一五二頁）

*2 「社会団体の要素たる被教育者それ自身の幸福とともに、社会全般の幸福の為に価値創造の能力を養成するのが教育の目的である……」（Ⅰ、一三四頁）

*3 「衣食住一切の供給から生命財産の保護までも、悉く国家社会の団体生活のお陰でないものはない。……己が貴重生命を托し、社会の広大無辺の力によりて、始めて安楽幸福の生活が出来るものであるという事を感じしめ……」（Ⅰ、一六九頁）

*4 「教育は知識の伝授が目的ではなく、学習法を指導することだ……」（Ⅳ、六八頁）

「教育の本質を知識の伝授即詰め込み主義にあらずし

て、……」（Ⅳ、七〇頁）

*5 「学校教育に参加することは家政の一部の実行と心得なければならぬ。……子供の将来に必要な生活指導をなして、学校の不足を補うことである」（Ⅲ、一九八頁）

*6、*7 「学習を生活の準備とするのではなく、生活をしながら学習する、実生活となしつつ学習生活をなすこと、即ち学習生活をなしつつ実生活もすることであって、学習生活と実生活と並行するか、然らざれば学習生活中で実生活も、実生活の中に於て学習生活をもなさしめつつ一生を通じ、修養に努めしめる様に仕向ける意味である」（Ⅲ、二五〇頁）

（グエン・ゴック・ジャウ、ホーチミン総合大学総長）
（訳・かわむらよしこ）